

2020年10月18日 説教「失う時には失うとゆだねる」

創世記 43章 1～15節

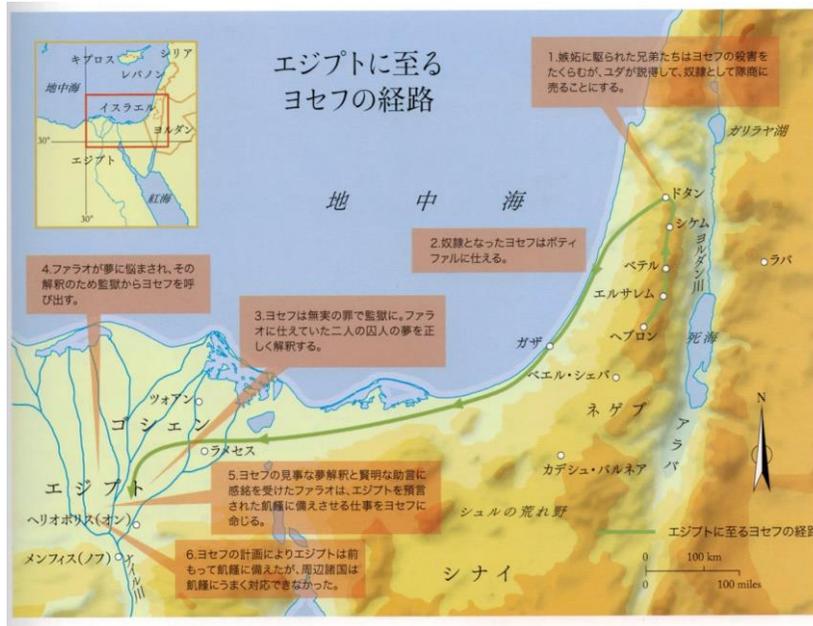
エジプトから戻ってきた息子達の報告を聞き、ヤコブは苦悩しました。

1. 再訪問を巡る父ヤコブと息子ユダの (1～5節)

- ①再度の食糧調達要請 (1～2)「さて、その地でのききんは、ひどかった。彼らがエジプトからも持って来た穀物を食べ尽くしたとき、父は彼らに言った。『また、行って、私たちのために少し食糧を買って来ておくれ』」さてカナンの地の飢饉も長引き、またしても食糧は枯渇してきました。背に腹は代えられず、エジプト行きを渋っていたヤコブも、食糧の調達を息子達に要請するのです。
- ②ユダの反応 (3～4)「しかしユダが父に言った。『あの方は私たちをきつく戒めて、『あなたがたの弟といっしょでなければ、私の顔を見てはならない』と告げました。もし、あなたが弟を私たちといっしょに行かせてくださるなら、私たちは下って行って、あなたのために食糧を買って来ましょう。』」四番目の息子ユダは父に告げます。宰相(ヨセフ)は弟(ベニヤミン)を連れて来なければ、エジプトに来てはならないと条件をつけていることのゆえに、食糧調達のためにベニヤミンを連れて行く許可を得ようとした。
- ③弟も一緒に (5)「しかし、もしあなたが彼を行かせないなら、私たちは下っていきません。あの方が私たちに、『あなたがたの弟といっしょでなければ、私の顔を見てはならない』と言ったからです。」あの宰相の口調を考えれば、弟を連れて行かずに、行ったとしても、拒否されるでしょうし、兄のシメオンに危害が及ぶかもしれません。ですから、ベニヤミンを同伴できないなら私達は行きませんと息まきます。

2. エジプトに下る条件 (6～10節)

- ①父の不満(6)「そこで、イスラエルが言った。『なぜ、あなたがたにもうひとりの弟がいるとあの方に言って、私をひどいめに会わせるのか。』ヤコブはそれを聞いて、息子達を責めます。どうして、もう一人の弟(ベニヤミン)の存在を、エジプトの宰相に伝えてしまったのか。おかげで、私はこんなに苦しんでいるのだ、とイスラエル(ヤコブ)は不満を述べるのです。
- ②根掘り葉掘り (7)「彼らは言った。『あの方が、私たちと私たちの家族のことをしつこく尋ねて、『あなたがたの父はまだ生きていますか。あなたがたに弟がいるのか』と言うので、問われるままに言ってしまったのです。あなたがたの弟を連れて来いと言われるとは、どうして私たちにわかりましょうか。』」息子達は、エジプトの宰相が根掘り葉掘り家族の事をたずねて来るので、答えざるを得なかったと弁解します。いわく、父は生きていますか、弟はいるのか等。ついつい、答えざるをえなくなり、挙句、その弟を連れて来いと言われたのですが、そんな展開になるとは誰が想像できましようかと父親に伝えまし



た。

- ③ユダの覚悟 (8~10) 「ユダは父イスラエルに言った。『あの子を私といっしょにやらせてください。私たちは出かけて行きます。そうすれば、あなたも私たちも、そして私たちの子どもたちも生きながらえて死なないでしょう。私自身が彼の保証人となります。私に責任を負わせてください。万一、彼をあなたのもとに連れ戻さず、あなたの前に彼を立たせなかつたら、私は一生あなたに対して罪ある者となります。もし私たちがためらっていなかつたら、今までに二度は行って帰ってこられたことでしょう。』」長男ルベンに続いて四男ユダも、ベニヤミンを守ることを父に約束します。命をかけて連れ帰ることを約束します。それに、食糧もためらいなく向かっていくなれば、道は開けるでしょう。早く決断していれば、二度ほども往復できたかもしれません。お父さん。決断してくださいと促したのです。

3. ヤコブの決意 (11~15 節)

- ①行きなさい (11~12) 「父イスラエルは彼らに言った。『もしそうなら、こうしなさい。この地の名産を入れ物に入れ、それを贈り物として、あの方のところへ下って行きなさい。乳香と蜜を少々、樹膠と没薬、くるみとアーモンド、そして、二倍の銀を持って行きなさい。あなたがたの袋の口に返されていた銀も持って行って返しなさい。それは間違いだったのだろう。』」ここまで来て、イスラエル (ヤコブ) もついに意を決し、宰相に気に入られるように贈り物の命令をします。乳香、蜜、樹膠 (香料)、没薬、くるみ、アーモンド、二倍の銀。カナンの名産です。二倍の銀と、誤って持ち帰った銀も忘れずに持ち帰るようにと注意をしています。ふっきれたヤコブの心中が伺えます。
- ②ベニヤミンを連れ (13~14) 「そして、弟を連れてあの方のところへ出かけて行きなさい。全能の神がその方に、あなたがたをあわれませてくださるようになります。そしてもうひとりの兄弟とベニヤミンとをあなたがたに返してくださるようになります。私も、失うときには、失うのだ。』」そして、息子達が一番問題にしていた、ベニヤミンのことについても、連れていくようにと伝えます。そして、主に委ねつつ、全能の神がその方 (ヨセフ) に、あなたがたをあわれみの情を与えてくださるようにと祈るのです。そして、帰りにはベニヤミンはもちろん、シメオンも一緒にもどってくださることができるよう願うのです。「私も、失う時には失うのだ」という信仰が備えられたのです。
- ③ヨセフの前に (15) 「そこで、この人たちは贈り物を携え、それに二倍の銀を持ち、ベニヤミンを伴ってエジプトに下り、ヨセフの前に立った。」それを受けて、息子達は父のアドバイスを取り入れた贈り物と二倍の銀を携えて、エジプトに向かったのです。もちろん、今回はなによりもベニヤミンが一緒でした。エジプトの宰相 (ヨセフ) の条件であったのですから、彼を守るようにしてその旅路を進んだことで

しょう。そして、ついにヨセフの前に立つことになったのです。

《結論》

ヤコブはなんとしてもベニヤミンを手放したくありませんでした。すでに、ヨセフを失い、シメオンも人質にとられてしまっています。それに愛するベニヤミンまで取られてしまうのではと恐れたのです。しかし、家族郎党の食も尽きようとしています。息子達を再度エジプトに送らなければ、ならない状態です。一方、息子達にしても、仮にエジプトに行くとしても、今度はベニヤミンを連れて行かなければ、あの宰相の顔を見ることなどとてもできないと思っていました。そこで、四男ユダは命を張って、父ヤコブにベニヤミンを連れていく許可を得ようとしたのです。本題からはずれませんが、このユダがイエス・キリストの系図 (マタイ 1 章) に名を連ねることになるなどは、本人はもとより誰も想像すらできないことでした。

さて、コリント書第二にこんな御言葉があります。「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします」(Ⅱコリント 7:10)。ヤコブがこのような悲しみ方をしていたかどうかはわかりません。しかし、詩篇の作者が「私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺された時、私は愚かで、わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした」(73:21-22) とあるように、叫ぶようにして祈っただろうことは容易に想像できます。その祈りの末に主は、「失うときには、失う」(14 節) という信仰に導かれたのでしょうか。ベニヤミンを送り出す決断をした時にそれが告白されます。ヨブが「主は与え、主はとられる、主の御名はほむべきかな」(ヨブ記 1:23) と告白した内容と重なるところがあります。ヤコブは、主に委ねることを求められ、ついに主に委ねたのです。たとえ、ベニヤミンを失うことになったとしても、主の御心に従おうと導かれていったのでしょうか。

私たちの歩みのなかでも、あれをこれをと、失うことの心配で身を削るような苦しみを持つことがあります。失うかもしれないのは、物かもしれない、あるいは人かもしれない。いずれにせよ、耐えられないような気持になるのです。しかし、失うことを恐れる歩みには平安がありません。信仰を学んできたヤコブですらそうでした。「失う時には、失う」とヤコブは導かれました。私たちも、失う可能性がある、失うかもしれないという微妙な時に、どうすれば良いのでしょうか。まずは、失うことがないように、願い求めていくのでしょうか。しかし、失うことがあっても、それが主の御心ならば受け入れていく信仰が大切なのです。究極は、主イエスのこの祈りです。「この杯をわたしから取り除けてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」(マルコ 14:36)。杯とは十字架に至る苦難です。主はその苦難の全てを受け入れて下さいました。それゆえ、私たちもいつも十字架の福音に立ち返って、自分を捨てて主に従っていきたいのです (ルカ

9:23)。そこにこそ、まことの希望もあるからです。